



えと文

伊谷賢蔵

ペルー寸描

ペルーの国土の、飛行機からの眺めはまことに壮大である。東西両コルディエラ山系は、折重ってアンデスの山塊となり遙かな天と地を劃して、限りなく視野一杯に横たわる。

雪に磨かれ、凍てついたようなこれらの山脈は、神秘をたたえ、あくまでも静寂である。しかしこの静けさは、やがて激しい動きの世界へとつながっていく。

雪の峰々から、流れ、くづれ、拡がってくる砂漠の起伏。初めは、小刻みにゆるやかに、そして、次第に逞ましくけわしい曲線を描いて、生きものとなって、眼下の南太平洋になだれこむ。私は、初めて見るこの地球の秘められた情景が、意外に厳しく、鬼気迫るもののあることを知って息をのんだ。

そして、その広大な自然と風土の中にこそ、ペルーの永い歴史が眠り、現在のインディオ達の生活があることを、今更のように噛みしめながら感慨に耽ったものである。

(行動美術会員)